2022年度活動概要　　ライティング研究会

2022年度の研究会は６回予定して、そのすべてをオンラインではなく、対面で実施できた。研究会が名古屋駅の近くの名古屋外国語大学名駅キャンパスで実施できたからかもしれない。それが功を奏してか、４月よりメンバーも一人増える。また参加者の中に「ぜひ私にも意見を言わせて」という盛り上がりがあり、オンラインでなく、対面の利点をつくづく感じた。

次に2022年のテーマ「日本人にとって英語で書くとは何を意味し、日本人のために英語のライティング指導をする意義は何か」に沿う話し合いはどうであったのか。実は、このテーマを掲げた最大の理由は、２月に起こったロシアによるウクライナ侵攻である。そしてウクライナのゼレンスキー大統領が多くのウクライナ支援国の議会や国会で積極的に「英語で演説した」ことは英語を教える者にとって大きな刺激となった。ただし、日本の英語教育に携わる人が国際的なフォーラムに英語の文章を寄稿したり、そこで演説をしたという事実は耳にしない。

社会全体に目立つ形ではなく、自分が担当する「英語の授業」の中で、自分が教える学生一人ひとりに「英語で書く意義」を伝え、また「英語で書くお手伝い」をすることができればそれで英語教師としては十分役割を果たすことになるのかもしれない。では具体的には何ができるか。

一つは、日々流れる英語ニュースを使って（たとえば、『Better Reading, Better Writing with NHK WORDL NEWS』）、学生に興味ある話題に注目させ、自分の考えを英語でまとめ、それを読者にもわかるように修正していくことかもしれない。もう一つは、英語と言えば、英米のライティング指導が「主流」だったが、フランスの「論理的思考」も学ぶこと（『「論理的思考」の社会的構築―フランスの試行表現スタイルと言語の教育―』）でより広い国際コミュニケーションに役立つライティングの在り方を、またその指導法を見出すことができるかもしれない。さらに、日本人の先住民アイヌの民族誌（『＜沈黙＞の自伝的民族誌―サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』）などを読むことによって日本人自身が抱える問題に思考をめぐらし、新しい視点で世界について考え、その表現方法を学ぶ機会を提供することで英語教師としての役割を果たすことができるかもしれない。